



公益社団法人 日本山岳会

宮崎支部報

第84号



森永橋より大森岳・矢筈岳・釈迦ヶ嶽・式部岳等(山の魅力より・p.12)

令和6年度通常総会報告・お願い 4月13日(土)

日高 研二

新体制で支部の運営に取り組んできて早1年が過ぎました。反省すべき点、多々あったかと思いますが、概ね計画通り遂行できたのではと思っており、これもひとえに会員の皆様方の温かいご支援ご協力によるもので、心から感謝申し上げます。

((総会報告))

令和6年度通常総会を4月13日(土)正会員総数41名中38名(うち委任状15名)出席のもと開催し、令和5年度事業実績・決算、令和6年度事業計画案・定例山行計画案・収支予算案等について審議頂き、すべて承認されました。

令和5年度は新型コロナも5類に移行し、定例登山研究会は12回開催、定例山行も大きな事故もなく18回実施できました。特に昨年11月、素晴らしい天候に恵まれ、高千穂町との共催で5年ぶりに開催された宮崎ウェストン祭・祖母山記念山行は感慨深いものがございました。

本年度の事業につきましては、昨年度と同様に進めてまいりますのでよろしくお願いいたします。

((お願い))

当支部の課題としましては、会員の増強、支部活性化、事業活動参加者の固定化などがあげられるかと思えます。

現在の支部会員状況ですが、会員61名(うち会友20名)で減少傾向にあります。会員増強のためには支部

の定例山行等事業活動を外部に情報発信し、友人・知人や山愛好家などにも支部の活動に興味・関心を持ってもらうよう機会あるごと働きかけるなどして、地道に忍耐強く勧誘を続けて行かなければならないかと考えます。なお、SNS等での情報発信は今後の検討課題と考えます。

勧誘しやすくするためにも、また退会される方をできるだけ減らすためにも、支部が活性化するとともに魅力的であることが必要です。できるだけ多くの会員の皆様が支部のいろいろな活動(山行などスポーツ活動・支部報投稿など文化活動・懇親交流会など)に積極的に参加頂くことが支部の活性化に繋がるものと思います。

また、山行につきましては、お互いに注意を払いながら「安心安全」を心掛けて山行頂きますようお願いいたします。

日本山岳会創立120周年記念事業の山岳古道調査につきましては、鋭意取り組んで頂いておりますが、本年度が調査最終年度となっております。会員の皆様の参加ご協力よろしくようお願い申し上げます。

最後になりますが、アメリカの詩人サミュエル・ウルマンが書いた青春という詩に「青春とは人生のある期間を指すのではなく、心の持ち方を指すものである。青春とは心の若さである」とあります。

いつまでも心を若く情熱をもっていきたいものです。



盛会だった懇親会

栗林 淳子

総会後、ひまわり荘に場所を移し恒例の懇親会が行われた。総会記念講演の講師池上先生、新入会友2名を含め28名の参。4年振りのバイキング形式で弓削会員の乾杯の音頭で開宴となる。今年度会員となった荒武達郎さん、会友で新人の山上章二さん、川野竜朗さんの自己紹介から始まり、竹田会員の軽妙な司会で場も和み、食べたりビールや酒を酌み交わしコロナ禍控えめだった会話も大いに盛り上がる。剣道で鍛えた橋口会員の朗々とした歌声、弓削会員の甘い素敵な歌声とのど自慢も飛び出す。普段ゆっくり話をする事ができない先輩方との会話もはずむ。最後に全員で我が支部の愛唱歌「日向山旅賛歌」を谷口敏子会員の音頭で女子会員のほとんどがステージに上がり、共に登った山々に想いを馳せ15番まで歌う。この歌は宮崎支部発足時に目標とした「みやざき百山」が平成12年(2000年)に刊行されたのを機に谷口敏子会員が宮崎の山々への思いを歌詞にして古関裕而作曲「穂高よさらば」のメロディーにのせて歌い継いでいる歌だ。楽しい時間はあっという間に過ぎ、谷口菊美会員の一本締めで終宴となった。



伊東48城を歩きませんか！

現在、古道調査中である。そんな中、総会講演で池上一成先生の穆佐城の話聞く。それに刺激を受け、歴史好きな会員から宮崎には伊東48城がある。是非歩いて見ようと話題になる。48城とは戦国大名、伊東氏最盛期における支配域内に存在した外城及び砦の数である。宮崎支部の新たな目標として誰もが参加できる企画ではないかと思う。今は放置されたままの所が多く、探すのも一苦労だろうが歴史を知るよい機会になるのでは。(文責 橋口)



支部総会記念講演【**穆佐城ってどこにあるの？どんな歴史があるの？**】

穆佐城ガイドの会 池上一成

私が穆佐城に関心を持ったのは、10年ぐらい前に、市の文化財課が主催した「穆佐城で遊ぼう！」の様子をニュースで見たのがきっかけでした。子供たちが、弓的を射ったり、高いところから石を模した新聞紙の玉を投げたりする様子などが報じられていました。山城の地形を利用した子供たちの遊びに新鮮さを感じたのでした。私の世代なら、子供に棒を持たせればチャンバラ、石を持たせたら誰が遠くに投げられるか！誰が的に当てられるか！また、竹で弓を作ったり…。それが普通でしたが、今の時代は、全てが「危ないからやめなさい！」です。だから、この山城イベントに非常に関心を持ったのでした。その後、市主催の「穆佐城ガイド養成講座」の募集があり、早速、申し込みました。約一年かけて歴史的な内容や現地での山城の作りなど、いろいろ指導を受けました。

特に歴史的な内容では、鹿児島県出身の私には、興味深いところが多々ありました。その理由は、穆佐城の歴史の後半は、薩摩の島津氏と日向の伊東氏との争いです。特にえびの木崎原の合戦1572年(元亀3)後は、伊東氏の勢力の弱体化が始まり、やがて、島津4兄弟(義久・義弘・家久・歳久)の侵攻により、伊東崩れ(伊東一族の豊後落ち)1577年(天正5)が起きます。この島津4兄弟が誕生したと言われているのが亀丸城(鹿児島県吹上町)です。この城こそ私の実家の裏山にある山城なのです。こんな関係もあり、学校に勤務しながら「豊後落ちの道を歩こう会」を立ち上げ30数年間続けました。そんなことで、私の穆佐城との関りも何かしら縁があるような気がして、城の歴史や城の作りはもちろん、城のPRや城のガイドにも興味関心が高まり現在に至っております。

次に、本論の穆佐城について述べたいと思います。

1. 穆佐城の位置と規模 (平成14年 国の指定史跡)

○所在地:高岡町小山田(旧穆佐小学校裏山)

○規模:周囲2.5km 東西550m 南北280m 面積約12ha 高さ(周囲の田畑より約50m)

○特徴:

ア.3つの空堀によって、A・B・C・Dの4つの曲輪(くるわ)群に分けられている。中でもAとB間の空堀が一番大きくて幅30m深さ11mである。

イ.AとDの曲輪群は、戦いに特化し攻め込む敵を高い位置から有利に攻撃できるように工夫された配置になっている。

ウ.Bの曲輪群は城主を中心とした政所や関係者の住居と考えられている。発掘調査により伊東支配から島津支配へと主郭の大きな改造や火災の痕跡などが認められている。

エ.Cの曲輪群は、上級家臣団の屋敷跡である。

オ.空堀の縁には、掘った土砂を盛り上げ、堀の底(通路)からは内部が見えないように土塁が築かれている。

2. 穆佐城の歴史

ア.穆佐城は宮崎県内でも最も古い時期から存在する山城

昔から日向国に三高城(穆佐院高城、三俣院高城、新納院高城)ありと言われている。穆佐院の院とは、もともとは、律令政治が始まり、税の米等を集める大事な場所を意味するようである。このことから穆佐の地は古い時代から重要な場所だったと考えられる(古文書の中に穆佐城の名が出てくるのは、1335年(建武2)南北朝の時代になるが、当然もっと以前から存在していたと考えられる)。

イ.南北朝時代の穆佐城

1333年鎌倉幕府が滅ぶと後醍醐天皇による建武の新政が始まるが、やがて足利尊氏の反乱により、後醍醐天皇による南朝方(奈良吉野)と尊氏が押し立てる光明天皇による北朝方(室町幕府)に分かれ、お互いの勢力争いが激化した。この争いは全国的に広がり、日向国でも南北朝に分かれ相争った。

特に、穆佐院(荘園)は、尊氏の妻(登子)領であり、国富領は將軍家が京都五山天竜寺へ寄進したところでもあり、北朝(幕府)方としては、この地をしっかりと確保する必要があった。そこで、尊氏は足利氏一門の畠山直頭を日向・大隅の大將として穆佐城に派遣した。畠山直頭により北朝方の勢いは増したが、やがて北朝内の抗争が勃発し、直頭は、幕府に反対する足利直冬方に加わり、直冬方の勢力拡大に努めた。しかし、直冬が最も頼りにしていた義父の直義(尊氏の弟)が、鎌倉において幕府側に殺され、急速に直冬方の勢力は弱体化し、やがて畠山直頭の力も衰えた。室町幕府の力も代を重ねるごとに弱体化して、やがて群雄割拠の戦国時代を迎える。このころになると、鎌倉幕府の守護職、地頭職として下向していた薩摩の島津氏や日向の伊東氏の勢力が増し、領土拡張に急速に乗り出し、両氏が大淀川南岸一帯で激突することになった。

ウ.島津氏と伊東氏との激突と和睦(婚姻)

1399年頃 島津元久(7代)が 都都郡城主伊東祐安と戦い、山東領(大淀川南岸一帯)を制圧し、穆佐城主として島津久豊(弟)を置いた。しばらくして、久豊は、伊東氏と和睦を願い伊東祐安の娘と結婚し、嫡男忠国をもうける。1403年 島津忠国(9代)穆佐城にて誕生



(穆佐城内に忠国誕生杉あり＝三国名勝図絵)

エ.婚姻(和睦)してもすぐに戦い勃発

島津元久7代)が没し久豊が8代を継ぎ鹿児島へ戻ると、その間を縫って義父(伊東祐安)と嫡男祐立が大淀川南岸へ侵入し応永19年曾井・源藤の合戦で島津勢を大敗させる。島津勢は穆佐院も放棄して山東から一時撤退する。

オ.穆佐城に未練? (島津氏の山東への勢力拡大は持続)

一度放棄し、手を引いた島津勢であるが、12年後、薩摩の守護職である久豊が再度山東に侵入する。しかし、翌年穆佐にて没する。(久豊の墓所＝城近くの悟性寺跡)、その後、忠国も伊東祐安の子祐立と3度合戦をしているが、さほどの成果もなく和睦する。

カ.その後も代々、島津氏と伊東氏の領地争いは続く(その間は、穆佐城は伊東氏の支配下)

争いの地は大淀川南岸一帯から日南飢肥へと南下する。伊東祐堯(5代)は飢肥城攻めの途中、清武城にて没す。また、伊東祐国(6代)は、飢肥城攻めの中で飢肥城近くの楠原にて討ち死。

キ.伊東氏の全盛期(伊東義祐)と急な没落(豊後落ち)

日向国の48ヶ城を手中に収めたのは、伊東義祐(10代)である。しかし、1572年(元亀3)伊東軍は三ツ山城(小林)から、島津領の飯野・加久藤城を攻撃する。この木崎原の戦(えびの)で、島津氏に敗れた伊東義祐の勢力は徐々に弱体化し、その後、国境の城主たちは島津氏へ寝返りを画策する。やがて、1577年(天正5)野尻、紙屋城主が寝返り、同時に島津軍を城中に迎え入れたとの報を受け、義祐自ら先頭に立ち、佐土原から軍勢を引き連れ綾城まで出陣したが、さらなる謀反で退路を断たれることを恐れ、戦わずして佐土原城に引き返した。そして、籠城かと思いきや、直属の家臣までも謀反するのではと疑心暗鬼にかられ、籠城を諦め遠縁に当たる豊後大友氏を頼って落ち延びる道を選んだ。取るものもとりあえず、一族数十名が佐土原・都於郡城を捨て、豊後へ落ちて行ったのである。一行の中に、後の遣欧少年使節団員伊東マンショがいたことを特記したい。※この時点で、日向国全域が島津の支配地となり、穆佐城も再び島津氏の城となる。

ク.大友氏の南下と島津氏との激突

1578年 伊東氏一行を受け入れたクリスチャン大名の大友宗麟は、日向にクリスチャン国を作るとの野望と伊東氏の日向復帰をも考え、日向へ侵攻する。宗麟は延岡まで来て采配を振る。島津・大友軍が激突したのは、新納院高城(木城町)である。この戦いは、島津軍の釣り野伏せの策略に掛かった大友軍の大敗であった。結局、大友軍は豊後へと逃げ帰った。その後は、島津氏の勢力は、豊後方面だけでなく九州一円へと拡大することになった。

ケ.豊臣秀吉に助けを求める大友宗麟

島津の勢いに恐れをなした大友氏は、秀吉に島津氏の勢力拡大阻止を懇願する。一方、秀吉は島津氏の九州制圧は、自身の日本国統一の邪魔になると考え、九州征伐という名目で島津氏の勢力拡大阻止を実行する。秀吉は、1586年(天正14)大阪城を出て九州へと南下する。沿線の諸大名が秀吉軍に加わり最終的に豊臣軍20万とも言われ、対する島津軍は総勢3万だったと言われている。両軍が激突したのは、またも新納院高城(木城)であった。数度の戦いで、その差はありありと! 島津氏は、完全な敗北により一族を滅ぼされるより、(和睦/服従)を願い出て生き伸びる道を選んだ。結局、秀吉は島津氏の服従を受け入れ、島津氏の本領を安堵した。ただし、日向国は4分割して、飢肥を伊東氏に、佐土原は島津豊久に、高鍋は秋月氏に、延岡(縣)は高橋氏に統治させた。去川の関所外4郷の一つ穆佐郷は、島津氏の旧領地内であり、薩摩島津氏の支配地のままとなる。

コ.穆佐城の最後の戦い

1600年関ヶ原の合戦と時を同じくして、飢肥の伊東軍が縣(延岡)高橋家の飛び地宮崎城を攻撃し落城させるという事件が起きた。日向の4領主は、大阪にあり皆豊臣方に組していたが、伊東祐兵は、嫡男祐慶に国元の飢肥で徳川方の働きをして置くようにと密かに帰国させた。そして、家臣の清武城主稲津掃部介を大将に宮崎城を攻撃させ落城させた。その際、豊臣方に組している島津氏の穆佐城をも攻撃するが、穆佐地頭川田国鏡が城を固く守り、伊東勢は諦め退去した。

サ.天ヶ城の命名者は島津義弘・(内山城の大改築?)

天ヶ城が出来る前は、伊東48ヶ城の一つ内山城である。1600年9月、関ヶ原の合戦で敗れ敵中突破を図り名を馳せた薩摩の大將島津義弘は、鹿児島への帰路、船で日向の細島上陸、途中佐土原城に寄り、豊久の討ち死にを報告する。その後、義弘は、佐土原から高岡へ向かう途中、飢肥兵の宮崎城攻撃の様子を直に見聞きしたので、伊東氏の勢力拡大を身にもって感じた。また、今後、考えられる徳川方による島津征伐も考え、島津領日向の最後の守りとしての強固な城の必要性を考えた。そして、穆佐城より地の利の良い内山城を大規模に改築することにした。そして、日向・大隅・薩摩から強力な武士団(約700名)を高岡に移住させ、急いで天ヶ城を築かせたのである。

シ.穆佐城も天ヶ城も廃城!

関ヶ原の合戦(1600年)徳川幕府成立(1603年)大阪冬の陣・夏の陣(1615年)を経て、徳川幕府の力は強固なものとなり敵対する大名も皆無となる。1615年(元和元年)幕府による「一国一城令」が出される。これにより、国中の多くの山城が廃城となり、穆佐城も天ヶ城も同様な運命をたどった。だが、城は消えても、武士支配の機能は城外のより便利な場所へと移され、明治維新を迎えるのであった。

[1月定例山行-1] 小松山 1月13日(土)

武田芳雄

令和6年度の初登山は日南市の小松山である。以前別の山行のため下見をした時は下部駐車場より先は道が悪く20分ほど歩いたが、今回は4WD車で登山口まで行くことができた。「登山道」と書かれた案内板があり、そこから林の中を5分ほど歩いたところに石原コース・板床コースと書かれた案内板があり、石原コースを登る。

小松山(989m)は日南市では一番高い山となっている。杉林のなかを登り、やがて自然林となり急登となる。40分ほど登るとケヤキ林展望所でハート形のケヤキの林がみられる。その中に1本だけ杉の大木が見える。紅葉の季節は素晴らしいだろう。杉の植樹が多い日南の山のなかで小松山は自然林が残る貴重な山となっている。石原コースは急な登りが続き長いロープも3カ所張ってある。2つ目のロープの後は小松パラダイスの標柱があり、わずかな広場となっていて一息つく。3つ目のロープを登ると切り開かれた広い山頂に着く。雲ひとつなく穏やかな日和。山頂からは展望もよく日南市の街並みや青い海原には大島が見渡せた。

昼食を済ませ下山は、板床コースを緩やかに下って行くとすぐに小松大山神の祠がある。尾根を下って行くとケヤキ林分岐で、伐採が行われていてコースが分かりにくい。経験者と行かないと手間取るかもしれない。

伐採作業道を歩き再び林の中を歩くとケヤキ林の中に杉の大木が現れた。登りに展望所から見たあの杉の大木だ。そこから急な傾斜をロープを使いながら下るとケヤキ林登山口に着く。林道を15分程歩き、登り始めた「登山道」に帰り着く。

標高差457mだが急登も多くしんどいが満足な登山だった。帰りに道の駅「酒谷」で食べた草餅は頑張った褒美、とても美味しかった。

<参加者5名>栗林淳子・橋口三枝子・蔵屋とよ・武田芳雄・四宮林三

<コースタイム>清武クロスモールナフコ駐車場7:30～石原コース登山口9:10/9:35～ケヤキ林展望10:10～小松山山頂11:30(昼食)12:30～分岐13:20～ケヤキ林登山口14:10～石原コース登山口14:30～道の駅酒谷15:00/15:30～清武クロスモールナフコ駐車場到着16:20



ケヤキ林の大杉

[1月定例山行-2] 生目古墳・史跡散策 1月28日(日)

清水弘子

今回は誰もが気軽に参加できるような生目古墳群と国登録有形文化財2ヶ所を巡る。古墳群史跡公園駐車場に9時集合。風は強いが日射しは暖かい。参加者20名と共に会員の乾さんの説明で整備された古墳群を歩く。ここは古墳時代前期のもので五十基が見つかるそうだ。長さ100m以上の前方後円墳も三基。その中でも三号墳は137m。九州最大のものだと言われた。強力な権力を持つ人物がこの地に居たのであろうと想像をかきたてられた。また、三号墳と二十二号墳は後円部の頂上を戦いの砦として使用されたようだ。地下式古墳も多く、一般の方、権力者など、幅広い階層の人々の眠る場所(お墓)。なんともロマンをかきたてられる古墳群であった。次に国登録有形文化財の青木橋までののかな道に行く。富吉の納島地区六田川にかかるアーチ式の石造り、風格ある橋だった。大正14年に完成。今も人も車も往来している。

生目の杜のアイビースタジアムの中を歩きそのベンチで昼食を済ませ、同じく文化財の松浦家住宅で米蔵として建てられた石蔵と石塀、門を見学させてもらう。明治38年に建てられた格調高い石蔵は2階建て、屋根は瓦葺寄棟づくり、屋号は「紙屋」とあった。地域の人から

楮(こうぞ)を買って紙問屋を営んでいたと言われる。いかめしく堅牢な建物だが、蔵の外の石壁に彫られた模様はなんともやさしく愛らしくほっこりさせられた。田園風景の道をおしゃべりしながら約8kmの行程、スマホを開くと14,000歩となっていた。こんなに歩いたことに明日は大丈夫かな～と思いながらも楽しいハイキングだった。

<参加者20名>清水弘子・清家順子・谷口敏子・多田登美子・服部澄子・橋口三枝子・白賀智子・前原満之・吉田直人・日高研二・乾正太郎・谷口菊美・武田芳雄・多田周廣・櫻木勉・服部岩男・四宮林三・森本匠・会員外・吉永・森本

<コースタイム>生目古墳駐車場9:00～青木橋11:15～アイビースタジアム12:00(昼食)12:30～松浦家石蔵12:50～生目古墳駐車場13:30



3号墳・登れる古墳では九州最大級

[2月定例山行] 綾岳 2月10日(土)

蔵屋 とよ

矢筈岳登山道として知られていたルートに2021年4月に新たに設定された綾岳コースは標高664m、山頂までの往復5時間8kmのトレッキングコースとなっている。低山とはいえ登山口からの標高差600m、急登や岩場もありなかなかの健脚コースであった。

8時50分、登山口駐車場からスタートして約10分ほど川沿いの歩道を歩く。尾谷ホテル溪谷と記された看板があった。ゲンジボタルの生息地と記されている。9時に矢筈岳登山口を出発、緩やかな回り道を横目に初めから軽い登りを10分ほど進むと陽がさしこむ開けた所があった。筒で保護された苗木がテニスコート2面ほど植樹されている。ここで多田さんご夫妻は体調を考慮して下山され別コースを散策される。そして30分で”森の精”の標識。各ポイントに設置された「綾ユネスコエコパークセンター」による緑の登山道マップが優しい指標となっている。10時過ぎに第一鉄塔が現れその後ジワジワと登りが続く。10時40分、第二鉄塔を見上げ一息つく。その後30分で”風のひろば”と書かれた緑のマップ。ここには誰もが童心に帰れる手作りのブランコが揺れている。林道の中に現れた展望、綾の町や遠く日向灘が見えた。その後の登山道はシイやカシ類の広葉樹が高くそびえ、その間にユズリハ、ヤブツバキ、サカキなど中低木がみ

られる。一方、所によっては根こそぎ倒れた倒木も多く過去の台風や大雨が想像できる。また所有地境の目印ではないかと聞くホウライチクの大きな株が登山道の途中に何ヶ所もみられた。カシの大株にも驚く。根元から何本も幹が伸び大木となっている。地面に落ちたシイの実を見て山で遊んだ昔の記憶が蘇る。林道の中を倒れた大木をくぐったり大跨ぎで乗り越えたりしながら尾根道を歩くと12時10分頃岩場の急登が現れた。慎重に足場を確認しながら登っているとトレイルランの男性がいとも簡単に駆け足で下って行った。彼らの身体能力は脅威的だ。

最後に細いロープでクリアする岩場の難関が待っていた。そのあと綾岳と矢筈・釈迦ヶ嶽の分岐から間もなく12時45分綾岳山頂に着いた。日向灘を遠くに望みながらの昼食。思いがけず日向の会友(石田さん、甲斐さん)と会い記念撮影。約1時間の休息のあと下山開始。16時、駐車場着、17時河川敷駐車場にて解散。好天にも恵まれ充実した山行となった。

(参加者12名)多田登美子・栗林淳子・橋口三枝子・蔵屋とよ・前原満之・荒武八起・日高研二・武田芳雄・多田周廣・櫻木勉・四宮林三・栗林忠信

(コースタイム)大淀川河川敷駐車場8:00～綾岳駐車場8:50～綾岳登山口9:00～第一鉄塔10:05～第二鉄塔10:40～風のひろば11:10～綾岳山頂12:45(昼食)13:30～風のひろば14:30～綾岳駐車場16:00～大淀川河川敷駐車場17:00



登山口近くで全員で



一休み



山頂にて

双石山登山道整備と巖窟神社改修の材料運び 2月13日(火)

川越 政則

双石山は標高509mの低い山だ。なぜ双石山と名付けられたか、砕けやすい砂岩から成るためボロイシ山と名付けられたともいう。青島と同じプレートが隆起して誕生した山で別名「鼻きる山」とも言われる。中でも天狗岩は風化作用によるタフォニ地形で内陸の砂岩層に形成されたもので日本最大級である。天然広葉樹林も同じく学術的にも貴重な山として市民に親しまれている。

市内から車で約30分で登山口に到着する便利な場所に位置しており、名所、見所がたくさんある。最近特に登山者が増えてきて駐車場は土曜日、日曜日一杯ではみ出る程となっている。令和5年4月にNHK「日本百低山」で全国放送されたためか登山者が宮崎だけでなく九州はもとより全国各地から訪れるようになり登山道も悪化している。そこに以前から水が流れる箇所があり足場が悪い。そこで水のはける溝を作る計画と登山道に階段作りを進めようと取組む。調査に3ヶ月の日数が経過、特に材料調達と階段作りの寸法図り、場所によって全く違うのでその長さを調べるのにも手間がかかった。

今回は、出水のため泥濘となっている所にビニールパイプを埋め込み、排水させる作業を行った。そして足場の悪い所には木の階段を作り歩きやすくした。

30分ぐらい登った所に磐窟神社がある。登山者は登り下りに手を合わせ無事を祈る。雨の日は雨宿り、カミナリの際は休んで利用している。神社が古くなり雨漏りがひどくなったので屋根・壁を取り替えることになり、材料運びを山岳会、一般の方々総勢43名で登山道整備と同じ日に行って頂いた。リレー式で(一部は背負って)神社まで運ぶ大変な作業だったが、何とか終わることが出来た。材料運びは別の日にも3回に渡って行った。後日、立派に復元した磐窟神社を見ることが出来た。協力頂いた皆様に感謝です。大勢の方の願いが山全体に染みこんでいる山なので一步一步踏みしめて登り、事故の起こらない楽しい登山が出来ることを祈る。決められたコース以外は歩かないようにしてほしい。登山をする時は持参するものをしっかり準備して登ってほしいのです。

〈参加者9名〉服部澄子・橋口三枝子・前原満之・荒武八起・日高研二・武田芳雄・多田周廣・川越政則・山上章二



新しくなった窟屋神社

4月10日撮影



資材荷上げ



パイプの埋め込み



第39回諸塚山山開きと熊本・宮崎2支部交流会 3月9日～10日

荒武 八起

諸塚山は、古くから神山として信仰の対象となっている山である。山頂に十数基の円墳があると言われ、それが「諸塚=多くの塚・墳墓」と言う山名の由来とされ、別名大白山とも言われている。筑豊の英彦山、霧島の高千穂峰と並び、古くから修験道の霊山として崇められていた。諸塚村の面積は188km²、村民は約1,500人。95%を占める山林には、スギ・ヒノキなどの針葉樹と椎茸の原木となるクヌギがモザイク状に植林され、生産性と自然保護の理想的な林相を形成している。このような「森づくり」が高く評価され1985年(昭和60年)6月諸塚村に朝日新聞社より第3回朝日森林文化賞優秀賞が贈呈された。これを記念して「諸塚山山開き」は始まった。

折しもこの年の7月に日本山岳会宮崎支部は設立された。当時県内の7名の会員は東九州支部(大分)に5名、熊本支部に2名が所属していたが、県内で会員を募り28名の署名をもって宮崎支部として誕生したのである。このようなご縁で隣支部との交流が生まれた。特に熊本支部との交流は密で世話役を交互に担当し今日まで続いている。宮崎支部は発足に際し次の3つの行事を旗印として活動を開始した。一つ目はみやざきウエスタン祭の開催。二つ目は宮崎県内の山から100山を選定し冊子として刊行する。そして三つ目は、諸塚村主催の諸塚山開きを朝日新聞社と共に後援するであった。その諸塚山山開きも今回で39回目を迎えた。

今回の山開きは熊本支部との交流会を兼ねて計画された。思い返せば、2019年(令和元年)の第34回山開きも熊本支部交流会を兼ねていたが、当日は雨が強く開山式が中止となったため黒岳へ向かった。今回はそのリベンジであった。

一日目 ヤマダ電機を13時に出発し交流会・宿泊所とした六峰館を目指した。途中、買い物をしてながら予定どおり16時すぎに到着した。ほどなく熊本支部の方々も到着され再会を喜びあった。18時から交流会には藤崎村長をはじめ役場関係の方々、八重の平公民館長の岡田

氏のご参加もあり盛大な宴会となった。余りあるほどの酒類の差し入れもあり、二次会・三次会と続き夜が更けるのが惜しまれた。

二日目 目覚めてカーテンを開けると深い谷間を挟んだ向かいの山肌に陽が射している。快晴だ。過去38回の山開きのうち何回参加したか定かでないが、雨・みぞれ・雪などで今回のような好天は少なかったような気がする。弾む心で朝食・後かたづけを済ませ、8時15分に六峰館を後にし、開山式が行われる標高約1,150mの「緑の広場」に向かって曲がりくねった山道を車で登った。広場は既に多くの車でほぼ満車の状態で、参加者は約400名とのことであった。ここからは、九州で最初に隆起してできたという祇園山・揺岳をほぼ正面(西方手前)に、その奥に小川岳・向坂山・白岩山、そしてさらに左後方に国見岳・五勇山・烏帽子岳など九州脊梁の山々が春霞の中に濃淡を異にして連なっている。壮大な景観と好天に恵まれたことを感謝しつつ開山式に臨んだ。開山式は神事、諸塚村観光協会会長挨拶・村長挨拶・朝日新聞社宮崎総局長挨拶と進行し地元中学生による「山への誓い」の朗読で終えた。ウッドカットの後、山頂を目指して出発した。

山道には雪がわずかに残り冷気が清々しかった。木々はまだ芽吹いておらず青空を背景に枝ぶりを競いあっていた。山頂に着く頃にタイミングよく朝日新聞社のヘリが飛来し何回も旋回しながら空から祝福した。木々の間から真西に雲仙を北に阿蘇山・九重連山を望むことができた。

下山後、緑の広場で熊本支部会員と再会を約束して別れた。温かい甘酒のふるまいとともに諸塚が村ぐるみで取り組まれた心のこもる山開きに心より感謝しつつ地元産の椎茸・日本ミツバチの蜂蜜・ワインなどを土産に帰路についた。

〈参加者・宮崎支部15名〉 谷口敏子・多田登美子・服部澄子・栗林淳子・橋口三枝子・荒武八起・日高研二・谷口菊美・武田芳雄・櫻木勉・服部岩男・四宮林三 日帰り組3名：竹田裕見子・平田五男・山上章二・会員外5名 〈熊本支部6名〉 中林暉幸・田北芳博・山本直・三宅厚雄・坂本雄二・中村寛

〈コースタイム〉 一日目：ヤマダ電機13:00～都農道の駅～東郷道の駅14:45～諸塚村六峰館16:20 二日目：六峰館8:15～緑の広場9:10/10:00～諸塚山頂11:15/12:00～緑の広場13:05/13:40～ヤマダ電機17:30



3月定例山行 双石山山開き〔加江田溪谷コース〕 3月17日(日)

谷口敏子

諸塚山山開きから一週間、多少の疲れはあるが溪谷歩きは出来るだろうと参加することにした。天気予報は「時々雨」にも拘らず、8時集合の広場にはすでに参加者でいっぱい。8時30分から開会式。神事後、3班に分かれ登山グループに続き溪谷散策グループは9時40分出発。この溪谷はかつて木材搬出で活躍したトローリ軌道が撤去され、その名残が遊歩道となった。各班に「加江田溪谷の会」のガイドさんが付き、ずっと丁寧に木・草・花の名やその特徴を説明をしてくださった。とくに木や草の特徴はメモしながら歩いたが、振り返って、さてどれほど私の頭に入っているか微妙である。住所を書いて切手を貼ると届くという葉の「タラヨウ」だけはしっかり頭に入った。ガイドの方から「森林浴の話」…五感を感じる…というパンフレットを頂いた。要約すると

①聴く…森の音、木立、かわのせせらぎ、小鳥のさえずりなど一脳活動の沈静化 ②触れる…木の葉、木の幹、木に抱きつく③見る…森の風景、緑をみる、眺める。④嗅ぐ…森の香りを嗅ぐ、深呼吸をする。⑤味わう…木の実、湧き水、台地の恵みを味わう

等々、話を聞きながら山には今真っ盛りのヒュウガヤマザクラの花に見惚れ、足下には溪谷の岩をしぶく流れに

癒されながら「硫黄谷」に着いた。昭和54年「日本のふるさと宮崎国体」ご臨席の昭和天皇のお歌「苔むせる岩の谷間に生ひげるあまたのシダは見つたの(も)」の歌碑の前に立つと、お姿が彷彿と浮かんでくる。目的地の多目的広場に到着し昼食。降雨がなかったことは幸いだった。帰路は思い思いにおしゃべりしながら、粛々と歩き広場に13時40分に到着。お心づくしの美味しいぜんざいを戴いた。

しろしとサツマイナモリ咲く山路

秋のホトギスにまた逢はむかな

タラヨウに「ありがとう」と書きしるし

風に飛ばして礼を言ひたし

(参加者13名・役員1) 清家順子・谷口敏子・多田登美子・服部澄子・栗林淳子・蔵屋とよ・川越怜奈・谷口菊美・多田周廣・櫻木勉・服部岩男・弓削達雄・栗林忠信 大会役員:川越正則



春到来！双石山山開き(山頂コース) 3月17日(日)

橋口三枝子

双石山、加江田溪谷開きが市山岳協会主催で行われた。天気はあいにく思わしくない。それにもかかわらず丸野駐車場には多くの人が集り(総数82名)安全を祈願する神事が執り行われた。

今回は硫黄谷登山口～山頂までのAコース、山小屋までをBコースとし、さらにAコースを3グループに分けた。我々5名は山頂までのAコースを登る。

加江田溪谷を30分ほど歩くと硫黄谷登山口だ。苔むした趣のある登山口、バナナの木は実を付けているがこのバナナが熟する事はなさそうだ。しばらくは沢水を横に見ながら行くと2列になった高さ8mほどの滝を見る。苔に覆われた橋を滑らないよう渡る。こちらから登るコースは奇岩や岩場はないがまた違った双石山の魅力を存分に楽しむことができる。足元にはサツマイナモリが群生している。山桜、ツツジも見ごろと咲き誇っていた。小雨も木々の中なので濡れるほどではない。麻島から桧山分岐を過ぎ急登を頑張ると山小屋だ(11:50分)小屋の中で昼食を済ませる。山頂まであとひと踏ん張り。

木の根の張ったアップダウンを30分ほど登ると山頂に着く。灰色の空、展望はない、しかし山頂の赤松は悠々とそびえ立ち素晴らしい。雨の降らないうち早々の下山

とする。登ってきた道を分岐の麻島まで下り、ここからはひょうたん淵へと下る。ちょうどこの辺りから本格的な雨となる。足元はぬかるみ始め気を付けながら、ひょうたん淵登山口に無事に着く。

他の班には低学年の小学生もおり、雨のなか心配したが後で元気に降りてきたと聞き安堵した。6時間の行程、充実した楽しい登山だった。丸野駐車場では温かいぜんざいが疲れた体に美味しかった。なかなか行けないコースで企画準備していただいた皆さんに本当に感謝です。

(参加者5名)橋口三枝子・荒武八起・日高研二・森本匠・山上章二

(コースタイム)丸野駐車場9:10～硫黄谷登山口9:40～麻島10:50～桧山分岐11:25～山小屋11:50/12:15～山頂12:40～山小屋13:15～桧山分岐14:00～麻島14:10～ひょうたん淵14:50～丸野駐車場15:10



[グループ山行] 鱒塚山山開き 4月14日(日)

荒武 達郎

早朝は少し肌寒く、鱒塚山頂には雲がかかっている状態であった。午前9時より田野天建神社の宮田宮司による安全祈願に引き続き、田野まちづくり協議会・松浦会長、小手川代表の挨拶を頂いた。宮崎市森林水産課、市議員の方々を含め約30名ほどの参加であった。多彩で新鮮な緑、そよぐ風、小鳥の声が心地良かった。

鱒塚山は1,118m、さほど標高はないが、宮崎市内のほぼ全域から見える秀麗な山である。NHKを初め各放送局・携帯通信・防災無線のアンテナ等、様々なアンテナが立ち並ぶ。その保守のための道路が整備されており、車で山頂まで上ることが出来る珍しい形態の山でもある。

今回も放送局のアンテナ建設時に整備された田野ルートからの登山となった。このルートは、私の生まれた年に自衛隊の協力によって切り開かれた事を松浦会長から伺い親しさを感じた。登山口入口から息切れしながら急な坂道を少し上がると、手入れの行き届いた杉や檜林の柔らかな道となった。汗をかきかき運動不足を後悔しながら、先輩たちの足手まといならぬよう必死だった。

途中、下山するトレイルランの若者達とすれ違った。「こんにちは！私たちはもう一回登って来ますよ～」と声を掛けられ驚いた。何本かの送電用の鉄塔の下を通り、ひいひい言いながら登っていると先ほどのトレイルランの若者

達が「今日は3往復やります」と元気に駆け上がっていく姿を見て若いて良いなとつくづく感じた。

汗をかきかき重い足取りでアンテナ群を目指して岩の多い斜面を越えると、今年も会えた！可愛いピンクの花弁。イワザクラの群生に疲れが吹き飛んだ。アンテナ群のある山頂にお昼過ぎやっとたどり着いたが、一面霧が立ち込め風も強く残念だった。汗をかいたシャツが異様に冷たく、避難小屋で昼食を済ませ早々の下山となったが、イワザクラに合えたことが心を和ませてくれた。

〈参加者6名〉 服部澄子・栗林淳子・橋口三枝子・荒武八起・服部岩男・荒武達郎

〈コースタイム〉 登山口9:40～イワザクラ群生地12:00～山頂12:50(昼食)13:30～稜線散策～下山開始14:50～登山口16:20



イワザクラ



ツチグリ



シャガ



[4月定例山行] 冠岳 4月28日(日)

山上 章二

冠岳(438m)は宮崎県日向市の西に位置し、冠のような山容をしており低山ながら非常に展望の良い山で、春にはヤマザクラをはじめ多くの花が咲く人気の山となっている。午前10時、地元日向の橋口邦彦会員の先導で冠岳東正面登山口から登山開始。まずは冠北岳を目指す。前日までの雨の影響で足元はとても滑り易く、十分注意を払いながら山頂を目指す。

冠岳は、この日も登山者が多く、交差には慎重さが必要であった。登山途中の会員との会話や励まし合いや気遣いもあり、会員の存在が心の支えとなる。五合目から宮崎県が南限で県の絶滅危惧植物に指定されている“ササユリ”を愛でるため、冠北岳を目指しルートを北側の尾根道へ進む。道中、新緑の木々や花々が咲き誇り、山の中の活気と生命力を感じる。そして淡いピンク色の“ササユリ”に出会うことができた。程なくして眼下に大きく蛇行した耳川と小野田集落の見える冠北岳手前の展望所で、絶景を楽しみながらの昼食。その後、冠北岳山頂を通過し12時30分冠岳頂上に到着。一緒に歩く喜びや山頂での達成感、会員との絆をより一層強固なものにしてくれる。

山頂から少し下って千畳敷と呼ばれる1枚岩を見なが

ら暫し談笑。山頂に戻り5合目まで沢沿いの山道を下山。14時、全員無事に登山口に到着。挨拶後、解散となる。

〈参加者13名〉 清家順子・多田登美子・橋口三枝子・甲斐洋子・荒武八起・日高研二・多田周廣・橋口邦彦・四宮林三・荒武達郎・福島龍好・山上章二・会員外石井

〈コースタイム〉 冠岳東正面登山口9:40/10:00～5合目10:50～第一展望所11:40(昼食)12:00～冠北岳12:10～冠岳(千畳岩)12:30～5合目13:10～冠岳東正面登山口14:00～ヤマダ電機16:15



[自然保護委員会]

1. 田野の森育林作業 3月3日(日)

最近、小谷登山口の育林作業が続いていたため、久しぶりとなる「田野の森」育林作業であった。3月3日はヤマザクラが咲いているのではと、花見も兼ねての行事設定であったが、一本だけ少し咲きかけはあったものの、ほとんどまだ咲いていなかった。もう少し経つと、満開のヤマザクラが楽しめるだろう。

現地までの道は、悪路のため乗用車で行くのはやめ、武田車1台以外は、入口の鎖があったところに置き、歩いて上がる。今回の作業は主に枝打ち作業を行った。枯れ枝や下枝の除去を行う。

〈参加者 8名〉 服部澄子・橋口三枝子・前原満之・荒武八起・日高研二・武田芳雄・服部岩男・荒武達朗



2. 小谷登山口補植作業 3月7日(木)

荒武さんの畑で育てたヤマザクラの苗を15本補植した。3年苗のため樹高が高く、根も大きくなり、細根が少なかった。諸般の事情で3年苗となったが、樹高・根の状態等から苗は2年苗がいい。

〈参加者 6名〉 服部澄子・橋口三枝子・前原満之・荒武八起・武田芳雄・服部岩男

前原 満之



写真1



写真2



写真3



写真4

写真1 うまく切られた切り口は、傷口がだんだんふさがっていき、最後は完全にふさがる。

写真2 枝は幹に沿って切るが、枝の基部のふくらみ、枝隆(しりゅう)がある枝は、写真のように、ノコ(矢印)の所で枝隆を残して切る。

写真3 枝を切る時、枝が幹から突き出した状態で切ると、枯れ枝がいつまでも残り、傷口をふさいでくれない。

写真4 今回、残念だったのは沢山のこぶのついた山桜があったことだ。桜こぶ病かと思われる。山の貸主の黒木さんに伐倒を依頼した。



ヤマザクラの植栽

✎ エッセイ

山の魅力

末永 軍朗

2年前に足を痛めて山登りができなくなったので、運動不足解消とリハビリを兼ねて時々自転車であちこち回っている。ある日のこと、橘橋の真ん中あたりを自転車で通りかかると、カメラを手にした旅行者らしき初老の人に声をかけられた。その人は、大淀川上流のかなたの方を指さし、「あの遠くに見える山は何という山ですか」と尋ねるので、小生が「あれは大森山という山ですよ」と答えるとその人は、「そうですか、遠くから富士山を眺めるような姿のよい山ですね」と答えた。確かに改めてよく見ると、いつだったか山梨県に行った時に見た、秀麗な富士山の山容によく似ていた。

我が家は、宮崎市北地区の大淀川と本庄川の合流地点近くにあるので、天気の良い日に堤防にでると、東西に横たわる綾町方面の綺麗な山並みを見ることができる。山名を西側からあげると大森岳、綾岳、矢筈岳、釈迦嶽、盤木山、式部岳、掃部岳、国見岳と連なり、そして少し離れて一番東側にどんと腰を据えて構えるのが尾鈴山である。3市4町に跨るこの山岳地帯は、火山地帯の山と違って荒々しさはないが、山全体が、世界に類を見ない照葉樹の森で覆われているため一年中緑が豊かで、人類を始め多くの生き物を母親のようにやさしく懐に包んでくれる癒しの山並みである。

過去これらの山には、何回か登ったことがあるが、各山々にはそれぞれに歴史と伝説が残る興味深い山である。その一端に触れてみると矢筈岳は、山裾から眺める山容が弓矢の矢筈に似ていることからその名がつけたいらしい。釈迦嶽は登山口の麓に日本三大薬師寺の一つ法華岳薬師寺があり、頂上には薬師寺の奥宮

が鎮座している。その前の広場からの国富町・新富町・宮崎平野・日向灘一帯を望む眺望は実に素晴らしい。

次に式部岳は、平成7年に国土地理院の地図に登録された若い山で、薬師寺に伝わる和泉式部伝説にちなんで、国富町が一般公募により命名したものである。この式部岳を北面に伸びる稜線を進むと、この山並みで一番の高峰である掃部岳(1223.4m)に至る。掃部岳には真冬になると年に数回雪化粧で白く染まることがあったが温暖化のせい最近では、あまり見るができなくなった。また、掃部岳の登山口に至る途中の寒川集落は、少子・高齢化の流れにより集落が消滅してしまっただけで、これも時代の流れかもしれない。

そして、一番東側に大きく横たわって見えるのが尾鈴山(1405.2m)である。尾鈴山には国指定の名称瀑布群があり、また山頂から南に延びる尾根伝いには、ツクシヤクナゲの群生地が見られ、春は花、夏は滝、秋は紅葉、冬は霧氷と四季折々に山の変化を楽しむことができ心に残る山である。尾鈴山の北側麓の日向市坪谷地区には、著名な郷土の歌人若山牧水の生家があり、牧水は、幼少のころから尾鈴山を見て育ったせいか、全国を旅しながら山の歌をいくつか詠んでいる。その中でも故郷の尾鈴山を詠んだ歌「ふるさとの尾鈴山の悲しさよ 秋も霞のたなびきており」は、特に有名である。

登山ができなくなって寂しさを感じるが、山は登るだけが楽しみではなく、美しい山並みを遠くから仰ぎ見たり、歴史や伝説を探り、また子供の頃、友と山で遊んだ思い出にふけるのも山の魅力のひとつだと悟ることができた。



たばこ畑から見る綾町・国富町方面の山並み

補導受託者の声

宮崎家庭・少年友の会

設立三〇周年に寄せて
短期補導委託・双石山登山

(公益社団法人)日本山岳会宮崎支部

顧問 荒武 八起

宮崎家庭少年友の会創設三〇周年誠におめでとうございます。これまでの友の会会員の皆様の熱心な活動に対し心より敬意を表します。

さて、日本山岳会宮崎支部では、平成一四年から延べ二九回にわたる登山を通して短期補導を担っており、活動状況等を紹介しつつ振り返ってみたいと思います。一回の登山に参加する少年は一〇二名ですが、七名という大人数を委託うです。

舞台となる山は、ほぼ双石山ですが一回のみ韓国岳で実施しました。双石山は、青島と同じプレートが隆起して誕生したと言われていて、日南層群の砂岩からなり、植生も豊かで貴重な天然林が残されているとして国の天然自然保護区、宮崎自然林森林に指定されています。登山コースは、小谷登山口から入山し、第二展望台を經由し稜線を辿り山頂から九平に下る約五時間の縦走ルートですが参加者の体力や天候によっては第二展望台往復の約三時間コースをとることもあります。

登山口で山岳会から登山に際しての注意事項などを説明し、準備運動を行った後、山岳会をリーダーとして、少年とその保護者を調査員、少年友の会、山岳会員が見守りながらの登山となります。行程の中で植物、生物、岩質、地形のことなどを適宜説明しています。登りはじめて、汗かく頃、行く先を遮るように無数の類円形の凹みを持つ奇岩の壁が出現します。通称は天狗岩と呼んでいます。



されたこともあり、実際の活動は、少年および保護者を調査員、友の会、学生ボランティアの方々と一緒に我々山岳会会員数名、一〇名が引率するという方式で行っています。日本山岳会には全国で三三の支部がありますが、補導委託登山を実施している支部は当初、宮崎支部だけでした。しかし、我々の活動が知られるようになり、最近では数支部が年間の支部活動として取り組んでいるよ

名はタフオニといえます。特殊な風化の結果生じるとされ、このスケールは国内でも珍しいと言われています。ここからは、ハシゴあり、ロープありの岩場の連続で、この頃になると額に汗した少年たちの表情も豊かになり、眼も輝いてきます。

登山口から約一時間半で第二展望台に到着します。ここからは宮崎市内、一ツ葉海岸などを広く見渡すことができ、遙かなるには尾鈴山・大森岳などが望めます。昼食の後、縦走路を辿り、約三〇分で山小屋、さらに三〇分で頂上です。この行程中、親子での会話も聞け、足場の悪い所では親の手をとり励ますなど、思いやる姿も見受けられるようになります。山頂で小休止の後に一時間ほど下ると九平登山口に到着です。ここで参加者のコメントや少年たちの感想を聞き解散となります。

感想の一部は同意を得て匿名で我々の機関紙である支部報に転載させていただいています。その中から少年たちの感想を抜粋すると「きつかったけど楽しかった」

「自然の素晴らしさに気付かされた」
「きょうの登山をこれからの生活に生かしたい」
「親に大変つらい思いをさせたことを反省しながら登った」
「今回の登山で苦しくても何事も諦めない大事さを学んだ」

「仲の良い友達を利用して悪いことをしてしまっただけ、これからは今回の登山のように励まし合いながら一つの目標に向かって進みたい」
「自然のすごさに自分がとても小さく感じられ、あの山みたいに大きな人間にならないといけないと思った。父親と昼食を食べるのは中学生以来で、母さんの弁当も初めてだったので、一生忘れられない思い出になると思う」
など多くの思いがこぼれています。

これらの言葉は、本活動が少年たちの心に大きな変化を及ぼしていることを示しており、自然の理解畏敬、忍苦、達成、協調、思いやり、体力増強などの登山の目的がある程度果たされていることが

短歌

霧島演習場

初代後援部長

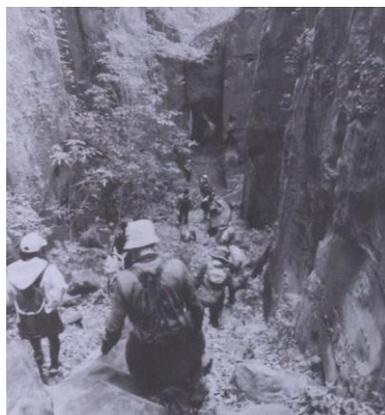
永峯 麗子

大関霧島の古里モンゴルに咲くといふ紫苑の花をまぼろしに見る
紫苑の花飾りて待てば後の月は光しらじらとりビングに照る

ゆらゆらと風にゆらぎ咲く紫苑わが悲しみのまたかへり来ぬ

慎太郎が帰国するといふ十月二十二日赤ペン持ちてマーカー入れる

遠々と郭公の鳴く霧島演習場日米共同訓練が始まるオスプレイも来る
叢にしきりに啄む雀二羽三階の窓にわが見てをりぬ



実感できます。五時間足らずという短時間のふれあいの中で我々山岳会がどれほど貢献できるかわかりませんが、この活動の継続が少年の更生に役立てば幸いです。

支部行事予定表(5月～9月)

[事務局だより]

月 日	行事名	備 考
5月2日(木)	第294回定例登山研究会	宮崎市中央公民館
5月11日(土)	定例山行 赤川浦岳	ヤマダ電機6時30分出発
5月25-26日(土、日)	全国支部懇談会	神奈川 記念山行 矢倉岳(24日)
5月26日(日)	定例山行 大幡山	大淀川ゴルフ場駐車場7時出発
6月6日(木)	第295回定例登山研究会	宮崎市中央公民館
6月8日(土)	定例登山 荒平山	清武ナフコ駐車場8時出発
6月23日(日)	定例登山 轟鉢山	清武ナフコ駐車場8時出発
7月4日(木)	第296回定例登山研究会	宮崎市中央公民館
7月13日(土)	定例山行 飯盛山(小林市)	大淀川ゴルフ場駐車場7時出発
7月28日(日)	定例山行 蓮ヶ池史跡公園散策	宮崎市芳士 蓮ヶ池史跡公園駐車場9時(現地)
8月8日(木)	第297回定例登山研究会	宮崎市中央公民館
8月11日(日)	家族ときめき登山 (検討中)	
8月24日(土)	巢之浦川大滝 (小林市)	大淀川ゴルフ場駐車場8時30分出発
9月5日(木)	第298回定例登山研究会	宮崎市中央公民館
9月14日(土)	御岳(鹿児島県鹿屋市)	清武ナフコ6時30分
9月22日(日)	飫肥街道(北郷町)花立～山仮屋	清武ナフコ駐車場8時出発

支部会務報告(1月～4月)

月 日	事業・行事	開催場所	人員	備考
1月11日(木)	第290回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	15	
1月13日(土)	定例山行・小松山	日南市	5	
1月28日(日)	定例山行・生目古墳と史跡散策	宮崎市	20	
2月1日(木)	第291回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	15	
2月10日(土)	定例山行・綾岳	綾町	12	
2月13日(火)	双石山登山道整備・資材荷上げ	宮崎市	9	市山協主催(総43名)
3月3日(日)	田野の森森林作業	宮崎市田野町	8	
3月7日(木)	双石山桜苗木植栽	双石山	6	15本植栽
3月7日(木)	第292回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	17	
3月9-10日(土日)	熊本支部交流会・諸塚山山開き	諸塚村	15	熊本支部6名
3月17日(日)	双石山・加江田溪谷開き	宮崎市	20	市山協主催(総79名)
4月13日(土)	第41回支部通常総会	宮崎市中央公民館	38	
4月13日(土)	第293回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	23	
4月14日(日)	鱈塚山山開き	宮崎市田野町	6	田野町主催
4月20日(土)	宮崎市市山協総会	宮崎市青少年プラザ	3	(総)12名
4月28日(日)	冠岳	日向市	13	

投稿のお願い 山行に関するものはもとより、随筆・詩・短歌・俳句など何でも結構ですので皆様の積極的な投稿を何卒よろしくお願ひします。また支部報に関するご意見などありましたら編集委員会へ忌憚なくお寄せください。

カラーページのご案内 配布します本支部報は、経費節減のため白黒印刷ですが、日本山岳会ホームページの宮崎支部を開きますと全カラーで閲覧できますので是非ご覧ください。

編集後記

新年度を迎え、桜をゆっくりに楽しめないまま、近頃は雨も多く体調を崩しやすい季節になりました。皆様、体調はいかがでしょう。私事ですが新型コロナウイルスも終息しているかと安心してたところ、ついにコロナに感染し長引く咳に悩まされています。健康が一番、と改めて実感しています。そして今、私たちの生活にスマホは欠かせないものとなっています。登山においてもルートの確認や記録にと高頻度で使います。一方、覚えのないメールやラインメッセージ、どこから情報が洩れているのかわかりません。十分気を付けて利用したいものです(蔵屋)。

公益社団法人 日本山岳会宮崎支部報 84号

発行責任者：日高研二

編集委員：橋口三枝子(編集委員長)、荒武八起、谷口敏子、多田登美子、栗林淳子、蔵屋とよ事務局：橋口三枝子

〒880-0930 宮崎市花山手東3丁目11-6

Tel, Fax 0985-51-4179, 090-7450-6406

E-mail: hashimie2713@gmail.com

口座：郵貯銀行 記号 17310 番号16269811

名義人：(社)日本山岳会宮崎支部